

東日本大震災被災地における学生ボランティア活動が、被災地の子どもに与えた影響

— 一家のインタビューと学生ボランティアの記録から —

島田和美¹⁾ 工藤宣子^{2)*}

¹⁾千葉大学大学院・教育学研究科・修士課程 ²⁾千葉大学・教育学部

The influence of student volunteer's activities on children
in the area affected by The Great East Japan Earthquake
— From interviews with a family and records by a student volunteer —

SHIMADA Tomomi¹⁾ KUDO Noriko^{2)*}

¹⁾Master's Program, Graduate School of Education, Chiba University

²⁾Faculty of Education, Chiba University, Japan

本研究では、被災地の子どもたちの心情や人との関わり方が、ボランティアの学生と関わることで、どのような経過を辿ってきたのかを明らかにすることを目的とした。調査対象者は、東日本大震災で原子力発電所事故の影響を最も大きく受けた、福島県X町の一家族6名である。調査方法として、筆者自身がボランティアグループの一員として被災地の子どもたちと関わり、活動の中で子どもたちの様子について取った記録と、インタビュー調査により、データを収集した。データを内容の類似性に基づき分類した結果、【混乱している時期】、【人との関わり方に戸惑っている時期】、【対人関係に困難を感じている時期】、【信頼関係が確立される時期】、【周囲に関心が向く時期】というカテゴリーが作成され、子どもたちの心情や人との関わり方の経過には5つの時期があることが確認された。被災地の子どもたちにとって学生ボランティアと関わることは、人間関係の形成に影響を与えたことが示唆された。

キーワード：東日本大震災 (The Great East Japan Earthquake) ボランティア活動 (Volunteer activities)
インタビュー (interviews) 家族 (family)

1. はじめに

2011年3月11日14時46分頃、東日本大震災は発生した。福島県では、3月11日の地震とその後の津波によって東京電力福島第一原子力発電所に事故が発生した。住民の避難については、各家庭単位による避難（個人避難）と自治体機能の転移に伴う自治体単位による避難（集団避難）の2種類の避難があり、集団避難については県外に避難する事例と、県内に避難する事例が報告されている¹⁾。原子力発電所の事故の影響を最も大きく受けた福島県X町の子どもたちの多くは、別の市に行政ごと避難しているが、帰還困難区域の解除の目途が立たず、復興住宅への移住が勧められている。X町は、自治体機能を他自治体に移転するとともに、移転先の他自治体に町立学校（分校）を設置しているという特徴的な取り組みを行っている。

筆者はボランティアグループの一員として震災発生1年半後から、X町の子どもたちが避難している仮設住宅に月1回通う活動を続けてきた。仮設住宅では、午前中は主に勉強に取り組む学びの時間とし、午後は自由時間として、少人数での生活を余儀なくされている子どもたちが集団で思いきり遊べるような機会にできるよう努めている。

被災地でのボランティア活動に関しては、ボランティ

アに行った人を対象とした研究が報告されている²⁾⁻⁶⁾。一方で、被災地の子どもたちがボランティアの人と関わることでどのように変化したのかということは、明らかにされていない。

筆者自身、ボランティアグループの一員として子どもたちと関わっていく中で、メディアで取り上げられている側面とは違った、子どもたちの表情や語りに触れて、子どもたちとの距離が縮まり、子どもたちが変化していく経過を身を持って経験した。

そこで、本研究では、被災地の子どもたちの心情や人との関わり方が、ボランティアの学生と関わることで、どのような経過を辿ってきたのかを明らかにすることを目的とした。

2. 方 法

(1) 調査方法

筆者自身がボランティア団体の一員として被災地の子どもたちと関わり、活動の中で子どもたちの様子について取った記録と、インタビュー調査により、データを収集した。

(2) 調査対象者

東日本大震災の中心的被災地であり、原子力発電所事故の影響を大きく受けたX町の一家族（父親の職業は原

*連絡先著者：工藤宣子 n.kudo@chiba-u.jp

*Corresponding Author：n.kudo@chiba-u.jp

子力発電所関係の仕事。夫婦及び、震災発生当時3歳から中学生までの年代の子どもたち4名で構成されている。6名を対象にインタビュー調査を行った。構成は表1のとおりである。

表1 対象者の年齢構成

対象	震災発生時の年齢	インタビュー当時の年齢
長女	14歳 (中学2年生)	19歳 (専門学校1年生)
長男	8歳 (小学2年生)	13歳 (中学1年生)
次女	6歳 (年長)	10歳 (小学4年生)
次男	3歳	8歳 (小学2年生)
父	—	—
母	—	—

(3) インタビュー方法

インタビュー調査は半構造化面接法で行い、震災後4年8か月経過した、2015年11月に実施した。

〈子どもたちへのインタビューガイド〉

- ①最近楽しかったこと、嬉しかったこと
- ②最近嫌だと感じたこと
- ③震災前に好きだったができなくなったこと
- ④震災の前後で、自分や周りのことで何か変わったこと
- ⑤ボランティアで一番楽しかったこと

〈保護者へのインタビューガイド〉

- ①震災から4年経つがどう感じるか
- ②各避難場所について (子どもたちの様子、その時の気持ち、大変だったこと、つらかったこと)
- ③学校について (学校が始まった時期、震災前と震災後の変化、学校での子どもたちの様子)
- ④震災前と震災後の子どもたちの変化
- ⑤ボランティア活動に関して (活動に対してどう思っているか、子どもたちの変化)
- ⑥子どもたちに必要な支援

本研究では、「各避難場所での子どもたちの様子について」、「学校での子どもたちの様子について」、「震災前後の子どもたちの変化」、「ボランティアを通しての子

もたちの変化」、「ボランティア活動に対しての思い」に関するデータを抽出し、分析を行った。

(4) 分析方法

インタビューに関しては、まず、録音した発話を文字データに起こして逐語録を作成し、逐語録をもとに意味のあるまとまりごとに区切った。研究協力者3名と協議し、子どもたちの様子を表現している逐語を抽出し、要約した。その後、子ども本人の発話データ、保護者の発話データ、及び、学生ボランティアによる子どもたちの様子に関する記録を時系列に並べ直し、4人分の初期データとした。初期データは内容の類似性に基づき分類した。

(5) 倫理的配慮

保護者に対して、途中辞退の担保、個人が特定されるような情報や内容はコード化することの2点について口頭で説明を行い、協力の許可を得た。

子どもたちに対しては、答えなくなかったら答えなくていいこと、途中で嫌になったらやめてもいいことの2点を口頭で伝えた。

また、全員にインタビュー内容をICレコーダーに録音することの許可を得た。

その後、保護者に対して、プライバシー保護のため、6人分の発話データの使用許可について確認を求めたが、必要ないとの回答を得たので、すべてのデータを使用した。

3. 結果及び考察

初期データを内容の類似性に基づき分類すると、5つの時期に分類された。その後、その時期の特徴を表現するカテゴリー名を作成した。その結果、【混乱している時期】、【人との関わり方に戸惑っている時期】、【対人関係に困難を感じている時期】、【信頼関係が確立される時期】、【周囲に関心が向く時期】と命名した(表2)。各カテゴリーに関する具体的な発話や記録は、表3に示した。

なお、文章中、本人のインタビューの発話のデータは「斜字」、保護者の発話のデータは、『斜字』、学生ボランティアによる子どもたちの様子に関する記録を〈ゴシック体字〉で表した。そのうち、特にその時期の子どもたちの

表2 子どもたちの変化を示す5つのカテゴリー

時期	カテゴリー名	特徴
震災直後	混乱している時期	子どもたちが突然の地震に、何が起きているのか分からず、混乱している様子である時期
1週間～1年半後	人との関わり方に戸惑っている時期	避難場所での大人や、避難した地域の子どもの関わり方や、仲の良い友達の転校に戸惑っている時期
1年7か月後～2年2か月後	対人関係に困難を感じている時期	関係の確立されていない人とのかわりに戸惑い、自分を防衛している時期
2年3か月後～3年9か月後	信頼関係が確立される時期	学生ボランティアと子どもたちの間に信頼関係が確立し、悩みを相談したり、スキップを求めてきたりする様子が見られた時期
3年10か月～調査時期	周囲に関心が向く時期	子どもたちが初対面の人と自ら関わったり、年下の子どもたちを気遣ったりする様子が見られる一方で、より多くの同年代の子どもの関わりを求めるようになった時期

表3 各カテゴリーの具体的な内容

時期	カテゴリー名	対象	当時の学年	初期データの例
震災直後	混乱している時期	長女	中学2年生	震災で今まで当たり前で大好きだった日常がいきなり変化したことに、戸惑いを感じた。(本人の発話)
		長男	小学2年生	最初に避難したときは、何が今起こっているのかわからず、何が起きているのだろうと思った。(本人の発話)
		次女	6歳	幼稚園からの帰りのバスで、他の子どもたちと一緒にいたが、周りの子は泣いていて、自分は泣かなかったが怖かった。(本人の発話)
		次男	3歳	なにがなんだかわからない様子だった。(保護者の発話)
1週間～1年半後	人との関わり方に戸惑っている時期	長女	中学2年生～高校1年生	学校が始まることは楽しみだったが、仲良かった子はほとんど残らず、震災前とは違いさみしい学校生活になるのかという不安があった。(本人の発話)
		長男	小学2年生～小学4年生	人が好きだったため、公園でY市の子どもたちの中に入っていきおうとしたが、「来るな、X町の子だろ」と言われ、入れてもらえず、黙って立って見ていた。(保護者の発話)
		次女	6歳～小学2年生	新しい公園で本当は遊びたくて長男たちの様子を見ているが、入っていきせず、次男と遊ぶしかなかった。(保護者の発話)
		次男	3歳～5歳	体育館避難時には、放射能の影響で子どもが外で遊ぶのも禁じられ、子どもたちは屋内で小さな声で話をしたり、大人の顔色をうかがいながら過ごしていた。(保護者の発話)
1年7か月後～2年2か月後	対人関係に困難を感じている時期	長女	高校1年生～高校2年生	長女は、元々X町にあり、震災後は短大の空き教室で開校されている高校に入学したが、人間関係がうまくいかず転校した。(保護者の発話)
		長男	小学4年生～小学5年生	キックベースでルールがわからず我流で通そうとする次男を叱ったり、サッカーでルールを守れない年上の男子と喧嘩をする様子が見られる。(関わりの記録)
		次女	小学2年生～小学3年生	ホワイトボードの裏に隠れて一人で静かに絵を描いていることが多かった。(関わりの記録)
		次男	5歳～6歳	ルールが守れず長男に叱られてからは、特定の学生ボランティアを呼び、二人きりで三輪車に乗ったり追いかけっこをしたりして遊んでいたが、しばらくして長男のところへ戻った。(関わりの記録)
2年3か月後～3年9か月後	信頼関係が確立される時期	長女	高校2年生～高校3年生	人間関係での悩みを泣きながら学生ボランティアに話し、「やっと言えた」と言った。(関わりの記録)
		長男	小学5年生～小学6年生	冗談で叩いたり体当たりをしたり、スキンシップが多く、強くなってきた。(関わりの記録)
		次女	小学3年生～小学4年生	仲良くなった学生ボランティアの膝の上に乗ってきたりと、自分からスキンシップをとることが多くなった。(関わりの記録)
		次男	6歳～小学1年生	「猫の手ニャー」と学生の頬をつついたり甘えたりする姿も見られた。(関わりの記録)
3年10か月～調査時期	周囲に関心が向く時期	長女	高校3年生～専門学校1年生	家でさみしい思いをしている子どもが、幼稚園に来たら自分のことを見てもらえるためさみしくないと感じさせてあげられるような幼稚園教諭になりたいと思う。(本人の発話)
		長男	小学6年生～中学1年生	ボランティアでは、普段ふれ合えないような人や、絶対に会わないような人と出会えるため、やってよかったと思っている。(本人の発話)
		次女	小学4年生～小学5年生	下級生たちの面倒見もよく、年下の女の子二人に慕われていた。(関わりの記録)
		次男	小学1年生～小学2年生	鬼ごっこも人数が少なくてつまらないため、他学年の子どもと遊ぶことが多く、人数が多くなってほしいと思っている。(本人の発話)

特徴が表れている部分は~~~~~で示した。また、状況がわかりにくい部分は、説明のために筆者が()で加筆した。インタビューの発話のデータと、学生ボランティアによる子どもたちの様子に関する記録はそのまま使用したため、言い間違いや言いよどみ等もそのまま表記した。

(1) 震災直後【混乱している時期】

① 長女

本人のインタビューより、「地震が起きたときには、自分的にはわけもわかんなくて、わかるわけもなくて、一日一日が不安だったのはあるかな。」、「今まで普通

に学校で、自分の大好きな友達と会っていて、何気なく過ごしていた感はある、あれ？みたいな、どうしちゃったんだらうっていう感じで。」という発話が抽出された。

震災発生時は、日常が突然変化したことにより混乱していたことが示唆される。

② 長男

本人のインタビューより、「なんか、今起きていることがよくわからなかった。最初は……小学校。何起きていたんだらうな〜って。」という発話が抽出された。

最初に小学校に避難したときには、何が起きているのか把握できず、混乱していたことがうかがえた。

③ 次女

本人のインタビューより、「バスン中で、地震が起きて、座席から落ちこちていた。そんでたんこぶできた。バスン中に居たんだ、そんな時、みんなと一緒にだった。みんな泣いていて、私は泣いてはないけど、怖かった。」という発話が抽出された。

地震が起こり、突然の出来事に驚き泣かなかったが、怖い思いをしていたことが示唆された。

④ 次男

保護者のインタビューより、次男は『なにがなんだかわからない様子だった』という発話があった。

突然の出来事を把握できない様子であったことがうかがえた。

以上の子どもの様子から、震災発生直後は、子どもたちが突然の地震に、何が起きているのか把握できず、混乱している様子がうかがえた。この時期を【混乱している時期】というカテゴリーとした。

(2) 1週間～1年半後【人との関わり方に戸惑っている時期】

① 長女

本人のインタビューより、避難場所だったホテルでの生活については、「ホテルとかだと、毎日毎日他の人と顔を合わせたりしなきゃいけないから、疲れるなあって思っていたけど、でもやっぱり普通にマンションに引っ越してからは自分のプライベートの空間ができたっていうのもあるからよかったかな。」という発話が抽出された。

学校再開に関しては、「学校が始まるから楽しみだったけど、私が仲良かった子はほとんどみんななくなっちゃって、なんか違うなって、X町にいた時とは違うなって、さみしい学校生活になっちゃうのかなって不安になったのはあったかな。」という発話が抽出された。

避難所の生活では、毎日他人と顔を合わせなければならぬことに戸惑いを感じていたことが示唆された。学校再開に関しては、新しい人間関係の構築と、仲の良かった友達がいなかった学校生活に戸惑っていたことが示唆された。

② 長男

保護者のインタビューより、『公園があって、すぐそばに。そこに行ったときに、やっぱりY市の子たち

もちろん遊んでいて、長男は人が大好きなのね、だからすごい入っていけるんだけど、入れてもらえなくて。来るなって言われて。そんで、X町の子だらうって。ダメだ来るなって言われて、私も聞いていたから。でも長男はやっぱり友達になってほしいし遊びたいから、あの公園に行くたびに声かけたり、あと声かけても無視されるんだけど、もうずうっと黙って立って、ボール遊びをしている子たちをずうっと長男は見ているの。』という発話が抽出された。

住居の近くの公園で、長男が避難先の子どもたちにX町から避難してきたことに関して悪口を言われたり、無視をされたりして、入れてもらえず、黙って立って見ていたということがうかがえた。

③ 次女

保護者のインタビューより、『(住居の近くの公園で、長男が避難先の子どもたちにX町から避難してきたことに関して悪口を言われたり、無視をされたりして、入れてもらえず、黙って立って見ていたことがあり、)次女も一緒に遊んでいて。でも次女が公園に行きたがらなくなって。長男言われているの聞いているから。』、『近くの公園は行かないようになって。次女なんかも、やっぱり長男の見ているから、あの子は本当に余計に人に入っていけない性格だから、長男があの手で誘ってくれるんだけど、友達できたから行こうって言っても、いって行って。やっぱりだまーって立って、遊びたいんだけど、行けないのね。見てるのね、そう。だからもう次男と遊ぶしかないっていうね。』という発話が抽出された。

長男が悪口を言われたり無視をされたりしていた様子を次女がそばで見ているため、別の公園に行くと長男が遊びに誘っても、人の輪に入ることができなかったことが示唆された。

④ 次男

保護者のインタビューより『外で遊ぶのも禁じられて。放射能の。危ないから子ども外に出さないでって言われて。それがもう一週間二週間ぐらい続いていて。子どもたちもどんどんどんどん遊べないし、遊んでは怒られるし、しゃべっても怒られるし。顔色うかがいながら静かに遊ぶっていうことを、かわいそうなくらいして、子どもなんか静かになんか遊べないのになあとは思っただけど。やっぱりその子どもの四六時中ずうっといるから狭い学校の体育館やね、各教室避難場所だからね、うるさかったんだらうね。静かに遊べ！とか。』という発話が抽出された。

放射能の影響で、戸外で遊ぶことができないため室内で遊んでいると、大人にうるさいと叱られるため、大人の顔色をうかがいながら静かに過ごしていたことが明らかになった。

以上の子どもの様子から、この時期には、避難場所の大人や、避難先の地域の子どもたちとの関わり方、仲の良かった友達と離れることに関して戸惑いを感じている様子がうかがえた。この時期を、【人との関わり方に戸惑っている時期】というカテゴリーとした。

(3) 1年7か月後～2年2か月後【対人関係に困難を感じている時期】

① 長女

保護者のインタビューより『もともとX町にあった高校にね、入りたかったんだけど、それかほかの地域のね、短大？の中で空いている教室を借りてやってる高校、もともとX町にあった学校にね。だけでも寮生活だし、どうしても入りたくて入りたかったとこなんだけれども、人間関係うまくいなくて。で失敗しちゃって。で、帰ってくるってなって。それでY市の高校に行ったの。』という発話が抽出された。

また、本人のインタビューより「高校も最初普通にもともとX町に合った学校に通っていたから、ほかの市の大学借りていてサテライトでやっていて、で、そこからY市の中心のほうに移ってきたから、そこで、やっぱりそこにX町の子たちいて、その子たちといたんだけど、でも結局なんか、限られた世界で、どうしてもうまくいかなくなっちゃって、自分の中でなんか違うな～みたいな、この子たちといてもなんだか疲れちゃうな～っていうのがあって、で一回その時高1高2らへんで、その子たちとちよつと距離あけようかな～っていうのが自分の中にある」という発話が抽出された。

はじめは、Y市の短大の空き教室で開校されている地元(X町)の高校に行ったが、人間関係がうまくいかず、転校したことが明らかになった。また、転校先の高校にX町の子どもたちもいて、一緒に過ごしていたが、少ない人数の中で人間関係がうまくいかなかったことが示唆された。

② 長男

学生ボランティアの記録には、〈一つ上の年のルールを守れない男の子に対して怒り、けんかをしてしまい、他の遊びをしようと学生と、一番仲の良い男の子を誘う。〉、〈男の子たちや学生とキックベースをしていたが、ルールがわからず我流で通そうとする次男に叱る。次男が再び戻ってきたときは、注意しながらも参加させていた。〉という記載があった。

ルールを守れない子どもと喧嘩したり、思い通りにならないとすねてしまう次男を注意したりなど、避難所で静かに過ごさないと大人に怒られた経験などから、ボランティア活動内で過剰適応していたのではないかと推測された。

③ 次女

学生ボランティアの記録には、〈初めての参加で緊張していてこわばった表情で、口数が少ない様子。〉、

〈はじめは長女にくっついてることが多かった。〉、〈(仮設住宅の集会所にある)ホワイトボードの裏に隠れて一人で静かに絵を描いていることが多かった。〉という記載があった。

長女のそばを離れず、大勢の人数と初めて見る学生ボランティアや話したことの少ない子どもたちに戸惑い、緊張している様子であったことがうかがえる。

④ 次男

学生ボランティアの記録には〈ルールが守れず長男に叱られてからは、特定の学生ボランティアを呼び、二人きりで三輪車に乗ったり追いかけてこをしたりし

て遊んでいたが、しばらくして長男のところへ戻った。〉、〈注意した学生ボランティアのことを「くそじじい」、「くそばばあ」「キモイ」と言ったり、叩いたり蹴ったりすることがある。〉などの記載があった。

自分の思い通りに遊ぶことができないときに、特定の学生ボランティアだけと過ごそうとしたり、注意されると反抗したりする様子が見られた。子どもにとっての遊びは、もっとも基本的、根本的、原初的なニーズであり、大人に守られて遊ぶことは、安心、安全の保証であると言われている⁷⁾。このことから、他の子どもたちとの遊びの中で対人関係に困難を感じ、特定の学生ボランティアと遊ぶことで、安心感を得ようとしていたことが示唆される。

以上の子どもたちの様子から、この時期には、関係の確立されていない人とのかわりが困難である様子が見えたと考えられる。この時期を【対人関係に困難を感じている時期】というカテゴリとした。

(4) 2年3か月後～3年9か月後【信頼関係が確立される時期】

① 長女

学生ボランティアの記録には、〈学校の友人関係についての悩みを学生ボランティアに打ち明ける。〉、〈学生ボランティアに進路や恋愛について相談していた。〉、〈地震発生時のこと、人間関係で悩んだことを学生ボランティアに打ち明ける。〉、〈人間関係での悩みを泣きながら学生ボランティアに話し、「やっと言えた」と言った。〉、〈ボランティアは悩みを打ち明けられる場だと話す。〉という記載があった。

この時期、学生ボランティアとの信頼関係が確立され、友人関係の悩みを打ち明けたり、進路や恋愛について相談したりと、具体的に自分のことについて話す姿が見られるようになってきたことがうかがえる。

② 長男

学生ボランティアの記録より〈学生ボランティアに対してのスキンシップが、体当たりをしたり叩いたり多く、強くなってきている〉、〈男子学生と一緒にいて、プロレスごっこをしている。スキンシップの力が強い。〉という記載があった。一方で、〈男子学生に、学校での出来事や部活のことを話していた。〉、〈足を骨折し、外で遊べないためつまらなそうだった。怪我のせいで学校でもつまらないと話す。〉という記載もあった。

いい子でいなければいけないと過剰適応していた長男が、学生ボランティアとの信頼を確立して、ボランティアの男子学生へ体当たりをしたり、叩いたりスキンシップが強くなったり、今まで他の子どもたちができていないプロレスごっこをやっていたりした様子が見られるようになったと推測される。また、信頼関係を構築した学生ボランティアに対して、自分のことを話すようになってきた様子が見られる。

③ 次女

学生ボランティアの記録より、〈自分から学生ボラ

ンティアにちょっかいを出していた。仲の良い学生に冗談で叩いたりするようになったが、かなり力が強い。〈仲良くなった学生ボランティアの膝の上に乗ってきたり、自分からスキンシップをとることが多くなった〉、〈腕を触ったり、手をつないだりと学生ボランティアへのボディータッチが多かった。〉という記載があった。

この時期になると、冗談で叩いたり、膝に乗ってきたりなどという注目喚起行動が見られるようになった。このことから、避難してきたことに関して兄が悪口を言われたり、無視をされたりしていた様子をそばで見ていることが外傷体験になったのか、一人であることが多かった次女が、学生ボランティアとの信頼関係を確立したことで、積極的な行動をするようになっていったと推測される。

④ 次男

学生ボランティアの記録には、〈学生ボランティアの膝に乗ったり、手をつないだり、おんぶをせがんだりする姿が多く見られた〉、〈「猫の手ニヤー」と学生ボランティアの頬をついたり甘えたりする姿も見られた〉、〈一時間に一度くらい、「にゃーにゃー」と言ってすり寄ってくる〉という記載があった。また、〈男子学生とキャッチボールをし、父親と離れて暮らしているため、一緒にキャッチボールができずさみしいと話す〉という記載もあった。

この時期になると、学生ボランティアに甘えたり、スキンシップを求める姿がしばしば見られたことから、学生ボランティアと信頼関係が確立されたことが示唆された。また、父親と離れているさみしさを伝えてくることがあったことから、父親に求めたいことを、信頼関係が確立された男子学生に対して求めている様子が見えてきた。

以上の子どもの様子から、この時期には、学生ボランティアと子どもたちの間に信頼関係が確立したことで、悩みを相談したり、スキンシップを求めてきたりする様子が見えてきた。この時期を【信頼関係が確立される時期】というカテゴリーとした。

(5) 3年10か月～調査時期【周囲に関心が向く時期】

① 長女

本人のインタビューより、「ボランティアは、なんだろう、自分にとっての居場所、あったかい場所かな。なんか、ボランティアやる前とか自分から進んで、「あ、これやるよ」とかそういう風に自分からというのが苦手だったけど、でも、ボランティア参加して、なんか、あ、あたしでもこれできるんだ、これやってもいいんだって思えるようになった。これからもやっていきたいなあと思っている。」という発話が抽出された。

また、将来のことに関して、「今お母さんお父さんと普通にいる時間が子どもたちすごい少なくてお父さんお母さんと一緒に遊びたくても、仕事帰ってきてからだと、疲れているから一緒に遊べないからさみしい思いしている子いるから。幼稚園とかも見ていて、すごいなんか遊んで遊んでっていう子がすごい

いっぱいいるから、もっともっと保育園や幼稚園で先生としてだけで、子どもたちとは近い距離で、家でさみしかった分幼稚園に来たら先生に遊んでもらえるし、自分のこと見てもらえるからさみしくないんだなっていうふうに思わせてあげられる先生になりたいかな。」という発話が抽出された。

この時期には、ボランティアの活動の場が自分の居場所になったと感じており、また、他の人のために自分にもできることがあると感じていることから、自己効力感が向上したことが示唆される。加えて、自身の体験を振り返り、学生ボランティアとの関わりを通して居場所の必要性を感じたことが、子どもたちにさみしい思いをさせないような幼稚園教諭になりたいという未来的思考を育んだことが推測される。

② 長男

本人のインタビューより、「ん～、なんかなんだろう……ボランティアはあってよかったと思う。なんか、普段じゃふれられない人とふれ合えるし、絶対に会わないような人とも会えるし」という発話が抽出された。

保護者のインタビューより、『今まで面倒みられていた長男も、ボランティアに行くようになって、だんだん自分よりも下の子たちに気配りができるようになったんだよね』という発話が抽出された。一方で、『まして、うちも子どもたちなんかは中間処理施設っていうものは教えたのね、国の、汚い、原発で出た汚いものを、入れる場所のことだよって。たら、なんでX町に作らないんだらうねって。住めないのって。なんでみんな反対するのって。帰れないのって。だったら、X町に住めないのならばそこにゴミ捨て場として町をそういう風に変えればいいのかねって。うん。名乗りを上げて。それをするのがX町の役目じゃないのかなってのが。まあそういうこと言うのがすごいなあと思ったけどね、やっぱりだから地図には放射能マークになっちゃうな、なんて、長男なんか笑って言ってたけれどね。』という発話も抽出された。

学生ボランティアの記録には、〈X町の子どもたちとY市の子どもたちを集めて合宿を行った。同じ班の低学年の男の子と仲良くなり、食事や企画の時など面倒を見ていた〉などの記載があった。

いろいろな人と出会えたため、ボランティアの活動に参加してよかったという長男の発言から、ボランティア活動で人と関わることを通して、過去の避難先の子どものために悪口を言われたり無視をされたりした経験や、仲の良い友達が転校していった経験が、癒されていったと推測される。また、年齢のちがう子どもたちと過ごす中で、他の子どもたちへの配慮ができるようになっていったことが明らかになった。

一方で、中間処理施設について、中間処理施設を住めない地元の町になぜつくらないのかと話し、中間処理施設を町につくることが地元の町の役目だと考えていることが明らかになった。汚染物質の受け入れ先となる他の地域について気にかけている様子が見えてきた。

③ 次女

学生ボランティアの記録には、〈年上の女の子と、年下の女の子2人の4人で外で遊んでいる姿が見られ

た。下級生たちの面倒見もよく、年下の女の子二人に慕われていた。、小さい子たちの誘いに乗り、ケイドロをして遊んでいる姿も見られた。ケイドロでは、なかなか捕まえない小さい子にわざとつかまってあげていた。、自分から、二つ年上の女の子に話しかけ、一緒に話したりして過ごしていた。、などの記載があった。

また、学校での様子について、本人のインタビューより、「クラスは、8人。O小4人とK小4人。女の子のほうが多い。(ほかの小学校の子たちとは)あんまり……仲良くない。あ、遊ぶときは、人数が少ないから。教室が一緒だから、しゃべ、る……しゃべるけど、めっちゃしゃべったりはしない。鬼ごっことかサッカーして遊んでいる。もっと人数いたらいいな。」という発話が抽出された。

この時期になると、年下の子どもの面倒を見る様子や、自ら進んで活動に参加したり、話しかけたりしている姿が見られ、初対面の人とも話せるようになり変化が見られた。また、遊ぶときにもっと同年代の子どもの人数を求めていることが明らかになった。これらのことから、兄の悪口を言われたり、無視をされていた姿をそばで見たという外傷体験が、ボランティア活動の中で癒され、同年代の子どもたちとの関わりを求める気持ちが、徐々に芽生えていったためと推測される。

④ 次男

本人のインタビューより、「K小はぼくでえ、ひとりでえ、O小2人」、「ほかの小学校の子どもも話する」、「(ほかの小学校の子どもたちとも)まあまあ仲良くなった」、「んーと、鬼ごっこじゃつまんねえし。」、「もうちょっと大勢になったらうれしい。」、「1年生と遊ぶから……、5・6年生、4、4・3年生とか……」などの発話が抽出された。

保護者のインタビューから、『次男なんかは、人に優しくすることを覚えたのと、自分で何かをしたいって、自分だって何かができるんだっていう主張が強くなった。なんでも僕やるよ、僕できるよって。なんでもやりたがる自分で。で、やらせるとすごく得意げな顔になって喜んで、そう、で、なんでも話してくれることが増えた。』という発話が抽出された。

一方で、学生ボランティアの記録には、他の子どもたちとのかかわりに関し、鬼ごっこでは、鬼になりたくなかったが鬼になってしまった年下の女の子の代わりに、鬼を引き受けた。、自分より小さい子に教えながら野球をしていた。、などの記載があった。

学校では、外遊びも人数が少なくつまらないと感じていること、他の学年の子どもたちと遊んでいることが明らかになった。同年代の子どもたちとの関わりを求めていることがうかがえる。

一方で、家庭では、自分で何かをしたい、自分もできるという主張が強くなったこと、家事を自ら進んで手伝うことが増えたことが明らかになり、自己効力感が向上したことが示唆される。

ボランティア活動では、年下の子どもたちの面倒を見て、仲良く遊べるようになったことから、自分より年下の子どもたちのことを配慮できるようになった変

化がうかがえる。

以上の子どもたちの様子から、この時期には、子どもたちが自ら初対面の人と関わったり、周りの子どもたちを気遣ったりする一方で、より多くの同年代の子どもと関わりを求めるようになった様子がうかがえた。この時期を、【周囲に関心が向く時期】というカテゴリーとした。

4. まとめ

本研究では、被災地の子どもたちの心情や人との関わり方が、ボランティアの学生と関わることで、どのような経過を辿ってきたのかを明らかにすることを目的とした。分析の結果、子どもたちの心情や人との関わり方についての経過は、【混乱している時期】、【人との関わり方に戸惑っている時期】、【対人関係に困難を感じている時期】、【信頼関係が確立される時期】、【周囲に関心が向く時期】という5つの時期を辿ることが示唆された。

震災当初は、日常が突然変わったことにより混乱していた子どもたちが、避難所での大人や他人との関わりや、避難先の子どものたちからの差別を経験し、人との関わり方に戸惑っていたことが示唆される。そのような子どもたちが、学生ボランティアと関わることを通して、はじめのうちは関係の確立されていない人との関わりに困難を感じている様子がうかがえたが、次第に学生ボランティアと子どもたちの間に信頼関係が確立され、悩みを相談したり、スキンシップを求めてきたりする様子が見受けられるようになった。その後、子どもたちが自ら初対面の人と関わったり、周りの子どもたちを気遣ったりする一方で、より多くの同年代の子どもと関わりを求めるようになった様子が見られたため、学生ボランティアと関わることは、子どもたちの人間関係の形成に影響を与えたことが示唆された。

また、保護者からは、『ボランティアに参加して子どもの中ではいろんな人たちに接するってことは、何事にも代えられない財産だと思うよね。』、『まず明るくなったのと、話題が増えた。子どもたちの中ではボランティアの活動っていうのは自分たちの生活の一部になっているから、欠かせないのね。』、『それまでは、まあ震災当時はごもごもしゃべってて、何を言っているかわからないからちゃんと声出してしゃべんなさいって何回も言っていて、でも今もう、大きくなったのはね、ボランティアの影響なんだろうねえ。』という発話があった。ボランティアを通しての関わりは、子どもたちの変化に影響を与えていたことが再確認できた。

一方で、ボランティアを立ち上げた学生が、社会人となる年齢になってきている。後継となる学生は、震災発生当時中学生くらいの年齢であったこともあり、震災に関して詳しく知らないメンバーが少なくない。加えて、中学生や高校生になり、部活動が忙しくなってボランティア活動に来られない子どもたちも増えてきた。また、震災の記憶がない子どもたちが活動に参加するようになったりなど、子どもたちの構成も変化してきている。その結果、徐々に、学生ボランティアの活動に対しての意識が変容してきている。実際、保護者からは『もうこ

ここに来てくれた最初からのメンバーいるでしょ、そのメンバーの人たちが自分たちの道を進む年になってきているじゃない、だからさあそっちも当たり前じゃなくない。だから新しい学生さんたちくるでしょ、ちょっと次女が困惑しているの。まだ慣れないって。だから、必ず誰来るかなあとか、本当に自分たちが一番慣れて、大好きな最初のボランティア、初代のメンバーの学生さんたちが減ってきているから、ね。』という発話があり、次女が初期の学生がいなくなっていることに対して、戸惑いを感じていることも明らかになった。ボランティア活動の在り方が変化していることにより、今後同様の調査を行っても同じ結果にはならないと考えられる。子どもたちの心情も変化していくと考えられるため、新しい人間関係を構築していくうえでどのような経過を辿るのか見届け、さらに研究を進めていきたい。

被災に関して、揺れ、津波、原発事故など様々な状況がある中で、本研究では、福島県X町という限定された地域の一家庭に対する調査であったことが研究の限界としてあげられる。

5. 謝 辞

本研究を進めるにあたり、インタビューにご協力いただきましたご家族6名の皆様には、本研究へのご理解と多大なご協力をいただきました。

本研究に際しまして御指導・御協力をいただきました皆様に心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 1) 福島正行 (2012) 「東日本大震災における他自治体への「学校移転」に関する事例研究」—被災自治体・大熊町教育委員会と受け入れ自治体・会津若松市教育委員会へのインタビュー調査を通じて— 『東京学芸大学紀要 総合教育学系Ⅱ』, pp.333-345
- 2) 和井田節子・田中卓也・小林田鶴子・小泉晋一 (2013) 「一被災地支援ボランティア活動が教職志望の大学生に与える教育的意味—石巻市内の小学校における支援活動を通して—」 『共栄大学研究論集 11』, pp.251-272
- 3) 和井田節子・小泉晋一・小林田鶴子・田中卓也 (2015) 「東日本大震災の津波被害から回復しつつある小学校への支援—教員養成課程の大学生によるボランティア活動の可能性と課題—」 『共栄大学研究論集 13』, pp.201-225
- 4) 諏訪晃一, 渥美公秀, 関嘉寛 (2006) 「学生による災害時のボランティア活動と状況的関心：新潟県中越地震におけるfromHUSの活動から」 『ボランティア学研究 6』, pp.71-95
- 5) 水落洋志・尾上明子・菊地伸二・高瀬慎二・中村雅・加藤実治 (2012) 「ボランティア活動が保育者を目指す学生の自己教育力に及ぼす影響：東日本大震災復興支援ボランティア活動に参加して」 『名古屋柳城短期大学 研究紀要34』, pp.189-197
- 6) 茶屋道拓哉, 筒井睦 (2012) 「東日本大震災における学生ボランティア活動の教育的意義 (〈特集〉東日本大震災～被災地における支援活動の体験～)」 『九州看護福祉大学紀要 12(1)』, pp.25-37
- 7) 平成24年度厚生労働科学研究費補助金 (成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業) 「東日本大震災被災地の小児保健に関する調査研究」 (「東日本大震災が子どものメンタルヘルスに与える長期的影響に関する研究」) いわて班 (2013) 「Playfulness 遊びを通じた癒しと育ち—保育所調査と支援活動の記録—」, p.25